

CONSERVATION VOLUNTEERS Vol. 10

発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク（略称：JCVN）

シンポジウム特集____ 災害ボランティアの現場リーダー p1
報告____ 環境保全活動の評価 p6
リーダーミーティング2015の総括 p7
お知らせ__ リーダートレーニング研究会の日程、ほか p8

シンポジウム特集「災害ボランティアの現場リーダー」

朝廣 和夫（JCVN 副理事長/九州大学芸術工学研究院）

2015年2月11日に福岡県福岡市天神の福岡ビルの大ホールで「災害ボランティアの現場リーダー」をテーマにJCVN主催でシンポジウムを行いました。近年、大規模災害、また、毎年のように豪雨災害が各地で生じるなか、様々な形で多数のボランティア支援が行われています。災害ボランティアの現場リーダーはどのような活動を行い、また課題を抱えているのか。今後、起る災害に備え、どのような人材を育成すればよいのか。その様な課題に迫るため実施しました。また、共催に九州大学芸術工学研究院が加わり、執筆者が

関わる、JSTの安全・安心領域の研究¹⁾として、同様の課題の整理を進めることとしました。開催に際しては、多数の後援²⁾をいただきました。

全体の流れは、午前中の第1部に日本財団学生ボランティアセンターGakuvo代表の西尾雄志氏の基調講演を行い、午後の第二部では、3名の講師に次の話題提供をいただきました。NPO法人トチギ環境未来基地代表理事（本JCVN理事）の塚本竜也氏より、東日本大震災（福島県いわき市）の支援活動について。竹田市社会福祉協議会の水野匡也氏より、平成24年九州北部豪雨（大



分県竹田市)でのボランティア受入について。そして、NPO 法人山村塾事務局長(本 JCVN 理事)の小森耕太より、笠原復興プロジェクトを支えた現場リーダーについてです。最後に第三部として、30 分程度のパネルディスカッションを間を含めたワールドカフェを行い、わいわいがやがやとテーブルを囲み議論を行いました。本誌面では、私のほうで西尾氏、水野氏の講演内容を簡単に紹介し、アンケートの一部紹介、重松理事長のコラム

を紹介しします。なお、午後のパネルディスカッションの内容と、それにかかるアンケート結果については、誌面の関係で次号で掲載させていただきます。

1) (独) 科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発)「コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造領域」の委託研究「中山間地水害後の農林地復旧支援モデルに関する研究」

2) 後援団体: NPO 法人山村塾、NPO 法人がんばりよるよ星野村、NPO 法人福岡被災地前進支援、福岡県災害ボランティア連絡会、自然環境復元学会、八女市、うきは市、福岡県

【基調講演】災害と学生ボランティア

西尾雄志 (日本財団学生ボランティアセンター(Gakuvo)代表理事)

(早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (WAVOC) 客員准教授)

報告: 朝廣

西尾氏は2003~2009年までWAVOCで教員として従事され、2010年4月に、Gakuvoを設立、20年先を見越し、ボランティアの意義等を知った人材育成を目指されています。2011年の東日本大震災時には、延べ7,000人の学生を派遣し、現在も継続して派遣されています。その様なお忙しい中、シンポでは関わられてきた東北、フィリピン、阪神・淡路大震災、そして教育研究活動のご経験を踏まえ、時にボランティア論も含めながらお話いただきました。岩手県大槌町の港付近に散乱した漁具の手作業での収集はボランティアだからこそできたこと。石巻へのボランティア派遣では、ラグビー部のチームワークが機能したこと。阿蘇・久住高原に福島の子供達を受け入れ、学生だからこそ向き合えた子供達の笑顔。巨大台風に見舞われたフィリピン、クリオンにおけるハンセン病患者自身による水上住宅復旧と健康被害など、そこには、被災者と支援者を双方の立場から見る決め細やかな西尾氏の視点が紹介されました。これらのご経験を踏まえた西尾氏のお話しされたボランティア考として、特に、下記の点は重要であると感じました。

- ・ 学生ボランティアの参加動機には、問題解決型と自己実現型があること。
- ・ 参加したボランティアは、「〇〇に帰る」という表現をすることが少なくなく、活動で親密な関係を構築していること。
- ・ このように、活動は問題解決という目的を古市(2000)の述べる「共同性による目的性の冷却」をもたらし、「公-私」を行き来すること。

- ・ ボランティアには贈与性があり、その帰結は、服従・支配(権力関係)と、返礼・互酬(交換関係)の2通りがあること。

筆者が西尾氏のお話が腑に落ちたのは、紹介された学生ボランティア活動で多くの漁具を救ってもらった漁師さんの「今回は、オマエらに助けてもらった。ぜったい復興して、腹いっぱいまい牡蠣を食わせてやるから、必ずこの港に帰って来い!!」という言葉でした。実は、九州の農村などでのボランティア活動でも農家とのやり取りの中で見られる光景です。西尾氏の話の中に、共助が互助になる瞬間(ヒント)が語られたように感じました。実は、一人ひとりの自助、互助の人々を支える学生ボランティア、その関係の中に、共に生きる力が育まれていく。その様なことを教えていただいたように思いました。最後に、「強い社会とは、若者が大きな夢を持てる社会」、戦争の無い社会、飢えた子供のいない社会など、本気で若者がこのような夢を持つことができる環境をボランティア活動で育むことができる。この言葉は、西尾氏の学生を支援する結論であり、今後、強化すべき論点としていただきました。



【話題提供】 東日本大震災後の災害ボランティア活動を通じて考えたこと
塚本竜也 (NPO 法人トチギ環境未来基地代表理事/JCVN 理事)

本シンポジウムを通じてお伝えしたかったことは 2 点でした。1 つは、震災発生直後から始まる家屋の片づけなどの災害ボランティア活動の現場におけるリーダーの必要性について。もう一つは、復旧から復興に向けての歩みの中で求められる総合力と NPO の役割についてです。

1 点目について。東日本大震災のような大規模災害が起こった時、各自治体で社会福祉協議会を中心に災害ボランティアセンターが設置されます。特に災害直後はそこに全国からボランティアが多く集まり、活動を行っていきます。1 日に何百人、何千人という単位でボランティアがくることもあり、ボランティアセンターのスタッフはマッチングを行うことに多くの時間を使い、個々の作業現場における細やかなサポートまでは当然回ることができません。1 日に何十か所の現場で作業が行われ、基本的にその場に偶然集った人がチームとなり活動していきます。現場には当然様々な危険があります。また、即席のチームであり、指示系統も不明確となります。そこで重要になるのは、やはり現場でリーダー役を務めることができる人材です。作業前のオリエンテーション、作業分担、安全管理、休憩の取り方、ボランティアへの声掛け等が適切にできるリーダーがその現場に一人いると、活動はぐっと安定します。環境保全活動におけるリーダーに求められる力と共通点も多く、環境保全活動団体は日々の活動を通じてこのようなリーダーを数多く育てていくことが大切だという話をさせていただきました。

もう一点、復興に向けた過程における NPO の役割です。大規模災害からの復旧、復興の過程においては、時間の経過とその復旧復興の段階において求められる活動は異なってきます。ニーズは、細分化、個別化していきます。例えば子どもの遊



ぶ機会をどうやって維持するか、お年寄りの生活や孤立防止をどうやって支えるか、雇用やお金の問題をどうするか、新しいコミュニティや街のデザインをどうやって形成していくか、などなどその人が置かれている状態や抱えている個別的な課題に対応していくことが求められ、そこではやはりある程度の専門性が必要になります。いいかえると、日常的に活動している団体の得意やできることを生かしたサポートを形にしていくことが重要になるのです。それは、その地域にどれだけ多様な活動が日常から行われているかという総合的な力が問われてくることでもあります。災害への備えとして NPO ができることは、それぞれの団体が行っている活動が、震災などの災害時にどのように応用し、生かすことができるかということを考えておくこと、そして日常の活動にできる限り多くのボランティアを巻き込んでその活動をできる人を増やしておくことが大切です、という話をさせていただきました。

今回のシンポジウムでは環境保全活動を行っている団体だけでなく、様々な活動を行う団体の方々をご参加されており、災害ボランティア活動におけるリーダーの必要性と日常活動の延長線上の活動の重要性を多様な方々と共有できたことは大きな成果でした。

【話題提供】 全国での被災地支援活動の変化と今後の課題
水野 匡也 (竹田市社会福祉協議会)

報告：朝廣

水野氏は平成 8 年に社会福祉協議会に入られた後、各地の被災地の活動支援に携わられてきました。水野氏のご講演は、ボランティアが被災地に関るとときに、地域のこと、被災者のことを鳥の

目虫の目で知ること。関係機関と連絡を取り合い、被災地に寄り添いながら一緒に悩み、悲しみ、笑い、怒り、情報を提供すること。被災者の判断を大切にしながら、被災者に必要とされていること

を目的に一緒に支援すること。それが基本の「き」である、という重要性を重ねて指摘されました。また、次のような視点も話題提供されました。

- ・ **災害は日常生活の延長**：日ごろから繋がっているから、いざという時に対応できる。地域状況について、自治会長さんはどんな方か、被災した地域の特徴（人口、世帯の構成、開発の歴史など）はどういうところか。その理解に基づくかどうかで支援の方法が異なる。
- ・ **被害者に必要なこと、これから必要になってくること**：被害者のために何ができるのか、思うように行かないときに修正し、関係機関と柔軟に調整し、現場に即し最適な方法を皆

で創り出す力が必要とされている。被災者も仕事があり、生活をしながら片づけをしている。ボランティアとの時間が割けないこともある。相手の気持ちを知り、活動を進めることが大切となる。

最後に水野氏は、必要とされることは時間の経過と共に変わる。若い被災者、高齢の被災者でニーズやボランティアへの感じ方も異なるので、そのような情報を収集・提供し活動に生かせる仕組みづくりの必要性を指摘されました。全体として、災害ボランティアの規範、そして今後の仕組みについて問題提供をいただきました。

【話題提供】 笠原復興プロジェクトを支えた現場リーダー（平成24年九州北部豪雨）
小森耕太（山村塾事務局長/JCVN 理事）

○豪雨災害と復興支援プロジェクト

山村塾は、棚田や茶畑の風景が美しい笠原地区（福岡県八女市黒木町）で1994年に発足し、都市と農山村の連携による森づくりや棚田での米づくりなどの里山保全活動に取り組んできました。しかし、山村塾が活動してきた笠原地区は、平成24年7月九州北部豪雨により、河川や道路、山林、農地、家屋に甚大な被害が発生しました。徐々に進んできた過疎化などの課題が一気に進み、急速な人口流出と農地の荒廃が課題となっています。

そういった中、山村塾では避難所の運営支援、災害ボランティア活動などに取り組んできました。災害直後は、山間部である当地区への外部からのアクセスが容易でなく、公的な災害ボランティアセンターなどの支援が入ることが難しかったのですが、山村塾がこれまで培ってきた人脈や活動ノウハウを活かし、行政や社協等とも連携をとることにより、多くのボランティアの支援を受け入れました。また、家屋の泥出しなどの生活支援にとどまらず、水路や農地の復旧作業に取り組んだことにより、ボランティアを受け入れた地域農家の方々が再び「農業をがんばろう」と思えるようになったことが大きな成果でした。

○里山を守る山村塾→災害ボランティア

里山保全活動も災害ボランティア活動も、屋外での現場活動をチームで行うといった共通点がある一方、里山保全活動は年間計画や長期計画を立てて決まったフィールドで活動することに対

し、災害ボランティアは初めての現場が多く、手さぐりで進めていくという難しさがありました。

直後～初期_森づくり仲間



表-1 里山を守る山村塾→災害ボラ

| よかったこと | 不安だったこと |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ◆現場の作業になれた人材 ◆現場作業の運営ノウハウ ◆装備や道具、車両 ◆土地勘、地元農家とのつながり ◆行政や社協、他団体とのつながり | <ul style="list-style-type: none"> ◆2次災害のリスク ◆アクセス、通信状況悪い ◆大人数の受入れ ◆現場をまかせること ◆声かけ・フォローの不足 ◆進め方、ゴールが手さぐり（変化していく） |

○リーダーとして活躍した人たち

災害ボランティア活動では、多くの方々がリーダーとして運営を支えてくれました。災害直後は、スタッフと顔見知りで土地勘のある会員さんや森づくり仲間が活躍し、長期合宿メンバーは日々のオリエンテーションやストレッチ、雰囲気作りなどに貢献してくれました。また、地元の農家さんと連携したことで、道案内や作業指導の面で

とても助かりました。そういったリーダーの方々の特性に合わせて、役割分担を行うことで、はじめての人でも雰囲気よく、やりがいをもって参加でき、次第にリピーターの方々が増え、結果として大きな力となってくれたと考えています。

○まとめ・現場リーダー

もしリーダーがいないと、「判断・行動が鈍る」、「無駄な時間を過ごす」かもしれません。力量不足でも誰かがリーダーを担ってくれることが大切だと思います。また、誰もがなれるように、安全管理や作業技術、雰囲気づくりや声かけなど、「分業化や不足点をフォローする仕組み」が必要です。そして「現場リーダー」に求められる大切なことは、「自分が働くことより、皆で働く」

ことを考え、「今より次、今日より明日（将来）」のことを考えること。一人でも多くの方が現場のリーダーを担ってくれることで、よりよいボランティア活動が広がっていくことを期待します。

表-2 リーダーとして活躍した人たち

| 時期 | 属性 | リーダーとしての役割 |
|-------|-----------|---------------|
| 直後～初期 | 会員 | スタッフとの連携、土地勘 |
| | 森づくり仲間 | 運営ノウハウ、雰囲気づくり |
| 初期～中期 | 長期合宿・国内 | 送迎、オリエンテーション |
| | 長期合宿・外国 | 雰囲気づくり、ストレッチ |
| 中期～ | リピーター・経験者 | 時間や道具管理、作業技術 |
| | 災害ボラ団体 | 独立した運営できる |
| 常に | 地元農家 | 作業技術、送迎 |
| | 専従スタッフ | 全体管理、安全管理 |

シンポジウムのアンケート

朝廣 和夫 (JCVN副理事/九州大学芸術工学研究院)

シンポジウムの最後にアンケートのご協力をいただき、様々なご意見をいただきました。まず、回答者数、満足度を紹介します。

● 回答者数: N=38

● 本日の満足度 平均:4.588

満足度は 4.59 と比較的高く、幅広い年齢層の方にご参加いただきました。今回は誌面の関係で、午前中の西尾氏の基調講演にについてのみ、下記にご紹介し、残りは次号とします。

【ボランティア活動の本質】

ボランティアの行動や気持ちを言葉として話してもらい勉強になった。また、強い社会のために大きな夢を持つことの重要性など大切にしたい。一方で、ボランティアが陥りがちなポイント、単純に考えることの必要性も指摘された。

【被災地ニーズとボランティアサービス】

被災地のニーズに沿った活動の重要性。一方、活動をしたくても、誰に聞けば良いか分からない。

【被災者の気持ち、心の距離】

被災者の気持ちを理解する必要性を学んだ。

【ボランティアの帰るという意識】

【共同性による目的性の冷却】

【贈与関連】

贈与が服従という権力関係、負い目を与える。

【ボランティア活動の知識】

二次災害を考えるべき点が新鮮だった。

【リーダーとしての役割】

作業をするリーダー、そしてコーディネートするリーダーも必要。後者は、路地周りタイプと、意味を深めるタイプが必要。また、良いメンターが職業として成立する必要がある。

【活動の継続について】

学生ボランティアの持続性、後進の育成について。

【災害ボランティアに参加する理由】

参加理由は2種類。自己完結型でも良いと思った。

【現場へ参加することの大切さ】

リーダーのあり方が問われており、現場に参加することが大切だと思った。

実践事例の普及による農山村の保全・減災と災害復旧

重松 敏則 (JCVN 理事長)

1994年の阪神淡路大震災には、予想外の多数の若者が全国から支援に駆けつけ、日本の「ボランティア元年」と言われています。日本は温暖・多雨で四季の自然に恵まれています。台風や地震の脅威にさらされる宿命をもった災害列島でもあります。地球温暖化による気象の凶暴化

により、毎年各地で洪水が発生していますが、いずれの被災者も「これまで他人事と考えていたが、まさか自分達がこのようなめにあおうとは思わなかった」と途方に促されています。このような被災者を支援して勇気づけ、災害復旧や生活物資の配布などなどきめ細かいボランティアの活動は

重要な役割を果たし、無くてはならないものとなっています。

しかし、ボランティアが多数かけつけても、彼らを統率し地元の多様な要請や活動支援に繋ぐリーダーやキイパーソンがいなければ、烏合の衆となってしまいかねません。従って平常時からボランティアリーダーの養成やキイパーソンの確保が、全国各地で必要となります。

さらに、平常時から地元で都市と農山村との交流事業を行っている団体やボランティア組織があると、洪水などの被災時に都市からのボランティアを的確に受け止め、生活支援や災害復旧にあたることができます。今回のシンポジウムでは、以上のような課題や実践例の紹介があり、今後の対策として有意義なものでした。

それについても、南海トラフに起因する大地震が何時起こるかもしれないことや、今後も襲来するであろう風水害等が予測されるにつれ、全国

各地で早急にボランティアリーダーの養成やキイパーソンの確保が求められます。全国各地の自治体や政府は、先進の実践例に学び、必要な対策をとる必要があります。

そこで筆者は、全国各地にある消防団と小・中学校を核や絆とした地域と都市との交流事業の実施を提案します。過疎と少子高齢化により各地の消防団や小・中学校の存亡が問題となっていますが、これら既存の団体と教育機関が、手をこまねいて消滅を待つのではなく、人材の確保により活性化させるのです。経験と情熱をもった人材を全国から公募して受け入れ、都市への発信による地元農林産物の供給、移住者の受け入れ体制、平常時からのボランティアの受け入れによる、里山・棚田保全などによる減災活動などを展開してもらいます。JCYN は今後、そのような有能なボランティアリーダーや人材の養成に貢献できれば幸いと思います。

リーダートレーニング研究会報告

■環境保全活動の評価について

朝廣 和夫 (JCYN副理事長/九州大学芸術工学研究院)

2014年12月18日のリーダートレーニング研究会では「環境保全活動の評価について」をテーマにしました。題材は、CVA(Conservation Volunteer Alliance)の「環境保全ボランティア同盟認定プログラム(非公開資料)」を用い、団体の質保証の基準(今回は組織管理の必須基準)を対象にレビューしました。下記に項目をリストアップします。

【組織管理必須基準】

●一般業務

a) 一般公開物(64%)、b)活動実績数の記録(57%)

●人員管理

a) スタッフ管理の規定(24%)、

b) スタッフの紹介(50%)

●財務管理

a) 会計と財務管理システム(40%)

【活動管理必須基準】

●活動の検証と選定

a) 活動の提案(48%)、

b) 提案された活動の査定(40%)、c)協議(7%)

●ボランティア活動

a) 規範、権利、責任の説明 (20%)、

b) 活動の紹介 (87%)

c) ボランティアへの説明に対する理解度の確認 (100%)

d) ボランティアからのフィードバックの収集 (68%)

e) ボランティアからのクレームの管理 (-)

●活動の広報とボランティアの募集

a) 広報物 (93%)、b) 申込/登録の様式 (13%)

●活動の管理と提供

a) 活動リーダーのトレーニング (41%)

b) 全体的な活動の振返り (60%)

●リスク管理

a) 安全の心得 (73%)、b) 運転技術 (0%)、

c) 安全靴 (0%)、d) 安全な装備の使用(60%)

e) 救急箱の用意 (100%)、f) 初期対応(20%)

g) 支援の要請(60%)

【ネットワーク管理組織必須基準】

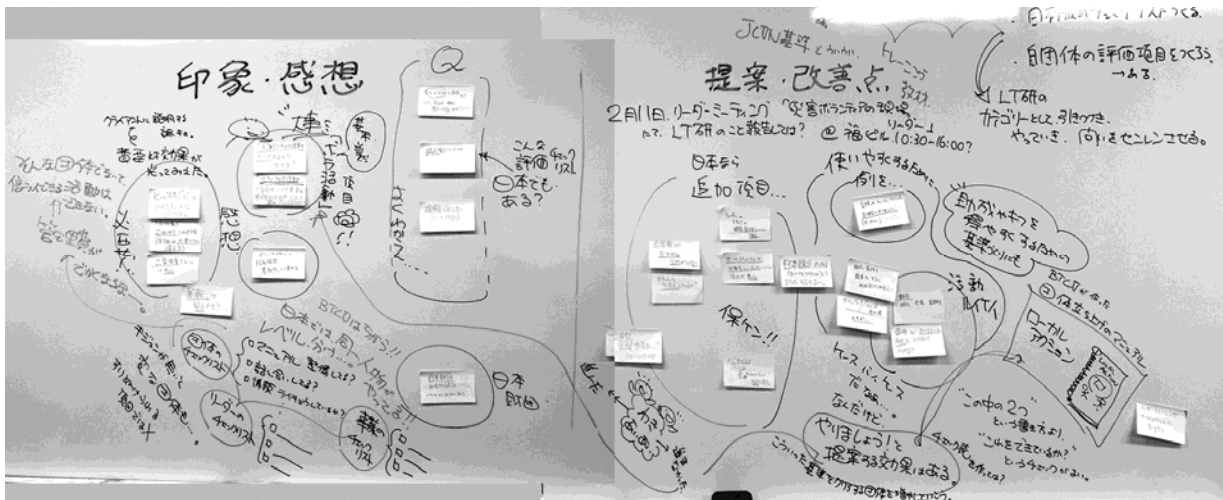
●会員と連携団体へのサービス

a) 中間支援として活動情報の提供 (100%)、

b) プログラムの選定 (53%)、

c) 助成金への申請 (33%)

●連携団体会員の能力の向上への取り組み



a) 基準の提供 (33%)

文中にある割合は5団体*を母数とした実施割合です(ネットワーク管理は3団体のみ)。これをみると、スタッフや活動紹介、ボランティアへの説明、救急箱の用意などは5割以上実施されています。一方で、ボランティアの規範、申込時のフォームなど、運営上の規範や情報処理の部分で未対応の傾向が見られました。なお、翻訳が不十分な箇所や、団体の活動にそぐわない基準もあったため、参考の数字です。

ディスカッションの中では、

- ・評価システムは今後求められるカテゴリ

- ・団体のよりどころになる
 - ・日本版、自団体の評価項目をつくる
 - ・組織管理のトレーニング内容になる
- という、基準の有用性の意見に加え、
- ・基準か? トレーニング教材として整理か?
 - ・さらに掘り下げて考える、学術研究も必要
- など、基準を考える意義への意見も出されました。今後は、その他の基準も含め、団体類型と基準のあり方、団体管理やトレーニングの内容に検討を繋げたいと思います。

*: NPO法人循環生活研究所、NPO法人日本環境保全ボランティアネットワーク、NPO法人山村塾、NPO法人グリーンシティ福岡、NPO法人トチギ環境未来基地

■ リーダーミーティング2015の総括

志賀壮史 (JCVN理事/NPO法人グリーンシティ福岡)

「リーダーミーティング2015～災害ボランティアの現場リーダー～」の余韻が残る2月19日、福岡市NPOボランティア交流センターにて、第11回目となるリーダートレーニング研究会を実施しました。参加者は理事・常連を中心に6名。密度濃い、まさに研究会的な雰囲気での2時間でした。

この日のテーマは「リーダーミーティング2015の総括」。2月11日のミーティングをふりかえりつつ、「事業評価」の手法について学びあいました。志賀からはごく手短かに「自己評価/他者評価」「量的評価/質的評価」「アウトプット/アウトカム」「データ/解釈」など、事業評価にまつわる視点やキーワードを概説。その後、1)参加者数・アンケート結果の共有、2)プログラムごとのKPT(良かった点、問題

点、改善提案)を出し合う質的な自己評価を行いました。

参加者の満足度としては高く、JCVNと災害ボランティアとのつながりが生まれたという良い点がある一方で、育成すべき現場リーダー像が示されなかったこと、登壇者のジェンダーの偏りといった今後に向けた改善点も多く出てきました。

続く後半では、これまでのリーダーミーティングの変遷をふりかえりつつ、「この事業が目指す『目的』とは何か?」を、あらためて考える時間となりました。話し合いでは事業目的、対象を次のようにまとめました。

事業目的: 今日性のある学びと、ボランティア同士のネットワークを通じて、各地によりよい環境保全活動を広める。

対象: 実践型ボランティア活動に興味ある人

当初、活動報告や交流を行う人たちの集まりとしてリーダーミーティングをはじめましたが、この数年はテーマ型として、他分野との連携や出会いを生み出しています。人を大切に、

楽しく安全な環境保全活動を広めるための学びと交流の場としての位置づけをはっきりさせることができた研究会となりました。

お知らせ

イベント・ボランティア情報

●JCVNリーダートレーニング研究会

JCVNでは、隔月で環境保全リーダーのためのプログラム研究会を実施しております。リーダーの方、関心がある方、私たちと一緒に活動したい方のご参加お待ちしております。

◇2015/4/16 ボランティア育成論

とき 上記 18時半～20時半

進行役 平 由以子 (JCVN理事)

会場 福岡市NPO・ボランティア交流センター
(あすみん/福岡市中央区大名 2-6-46)

参加費 (会員・学生) 無料 (非会員) 1,000円
循環生活研究所が昨年度行ったボランティア研修から1年、受講した学生達の成果報告と研修プログラムのレビューを行います。

◇6/18 リーダーのもつべきスキル

ワークショップ I (総会含)

進行役 朝廣和夫、志賀壮史 (JCVN理事)

分野別ボランティアリーダーの必要とするスキルをワークショップ形式で整理します。

◇8/20 リーダーのもつべきスキル WS II

◇10/15,12/17, 2016/2/11(LM),2/18

●NPO法人循環生活研究所の取り組み

◇循環学習会

①毎月第1水曜日 コンポスト学習会

②毎月第3木曜日 新聞鉛筆・紙の学習会

時間：11:00～12:00

場所：循環生活研究所事務所(福岡市東区三苦4-4-27)

jsk@jun-namaken.com 参加費：300円

◇生ごみ堆肥を使った菜園講座

堆肥づくり、野菜づくり

4/4、5/2 13:30～15:30

4/16、5/21 10:00～11:40 参加費：無料、

要予約：循環生活研究所 (092-405-5217)

◇親子農体験 (育てて食べよう)

日時：5/23 10:00～12:00

場所：立花寺リフレッシュ農園

内容：ジャガイモ、タマネギの収穫とサツマイモの植えつけ育てて食べよう(ごはん、味噌汁、つけもの)、参加費：300円、要予約：循生研

●JCVNの仲間を広く募集しています！

あなたの支援が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」できる環境保全活動をめざした団体のネットワークづくりの力になります。入会申込書をご送付いたしますので、事務局までお問い合わせください。

- ・個人正会員 (¥10,000/年)
- ・個人賛助会員 (¥5,000/年一口以上)
- ・団体正会員 (¥20,000/年)
- ・団体賛助会員 (¥10,000/年一口以上)

JCVN理事をはじめ、環境保全活動の専門家のノウハウが詰まった会報が、年に3回お手元に届きます！また、メーリングリストでもJCVNが開催・協力するイベント情報等を随時ご案内いたします。

活動への寄付も受け付けています。環境保全団体のネットワークづくり、リーダー育成支援のため、皆さまのご協力をお待ちしています！

[会費・寄付振込口座]

番号：01760-9-122407

名称：日本環境保全ボランティアネットワーク

CONSERVATION VOLUNTEERS 10

■発行日：平成27年3月31日

■発行頻度：年3回

■発行：特定非営利活動法人日本環境保全ボランティアネットワーク (略称：JCVN)

■事務局：〒810-0022福岡市中央区薬院4-5-2-202
tel/fax: 092-215-3966
e-mail: jcvn@greencity-f.org